

音楽的な変化を合図とする2人組形成における 相手選択と接触行動

Partner choice and contact action during a pair-making activity involving changes in music

連 桃季恵 (人間科学部こども学科助教)

Tokie MURAJI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Assistant Professor)

〈要旨〉

本研究は、音楽的な変化を合図に2人組形成を繰り返す活動において、幼児がどのような相手を選択し、どのように2人組を形成するのかを明らかにすることを目的とした。保育園5歳児クラスを対象とし、動きを伴う音楽活動を6日間実施し、2人組の形成過程を分析した。その結果、4回の相手選択において、ほとんどの幼児が違う相手を選択したが、同じ相手を選択する幼児も存在した。後者の中には、同じ相手に何度も接触を試みる幼児がいた。また、全活動日を通してかかわった相手の人数が多い幼児と少ない幼児の接触行動を分析した結果、前者は相手として誰でも受け入れる傾向にあり、後者は2人組になりやすい相手や2人組になりたい相手が限定的な傾向にあった。

〈キーワード〉

2人組形成、相手選択、接触行動、動きを伴う音楽活動、音楽的な変化による合図

1 問題と目的

保育所や幼稚園、認定こども園などの保育現場では、設定的な活動において、幼児同士が2人組を形成して活動を行うことがある。例えば散歩の整列時や運動会での組体操などの演目、そして動きを伴う音楽活動での手合わせなどが挙げられる。また、その時の2人組の相手は、保育者が決定する場合もあれば、幼児自身が自由を選択する場合もある。保育者が相手を決める場合は、幼児の意思は相手選択に反映されないことが多いが、幼児が自由に2人組を形成する場合は、相手に受容されたり拒否されたり、または相手を受容したり拒否したりすることもあるだろう。このような場面は、他者との多様なかかわりを経験する機会となり得るのではないだろうか。

幼児が自由に2人組を形成する場合、その行為には“相手の選択”と“相手への接触”が含まれる。前者は相手を選択したり、相手に選択されたりすること、後者は相手に接触したり、接触されたりすることである。しかしながら、2人組の活動に関する研究は、設定された2人組の相互作用について検討したものが多く⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾、2人組の形成過程について検討した研究は少ない。

越中・江村・目久田・前田⁽⁷⁾は、保育園の異年齢クラスにおいて、男女別に集団編成の様子と仲間からの人気度及

び社会的行動特徴の関連について分析した。その結果、2人組場面では、男児は攻撃性及び月齢の高い者を中心に集団編成を行い、女児は仲間から人気のある者及び社会的コンピタンスが高いとされる者ほど前方に位置していた。

また、遠藤・江原・松山・内藤⁽⁸⁾は、異年齢集団での音楽活動において、2人組などで行う遊び歌に取り組む幼児の行動を観察した。その結果、リーダー的な年長児は積極的に相手を巻き込んでグループの人数を増やしたが、慎重な性格の年中児はなかなか相手が見つけれずにいた。遊びになんとなく参加しているように見受けられた年少児は、同じ年齢の幼児とずっと一緒にいる様子が確認された。

以上の先行研究により、2人組を形成する際の相手選択や接触行動は幼児の年齢やタイプによって違いが見られることが示された。また、2人組を形成する回数が1度や自由であり、加えて、どちらも異年齢集団を対象としていた。

筆者が指導者としてかかわる動きを伴う音楽活動においては、音楽的な変化を合図として2人組形成を何度も繰り返す場合がある。具体的には、幼児2人組が向かい合って音楽に合わせて手合わせを行い、音楽が変化すると2人組を解消し1人で動き、再度手合わせの音楽に変化すると2

人組を形成するというものである。このような場面について検討した神原・高橋⁹⁾は、活動の回数を重ねるごとに、4歳児はペアとして選択した人数が増加したが、5歳児には4歳児のような傾向は見られなかったことを示した。しかし、どのような相手を選択し、どのように2人組を形成したのかについては検討されていない。2人組になるためには、自らが積極的に他者を受容し、他者への積極的な働きかけが必要¹⁰⁾である。また、年長児の好き嫌いの関係を越えた仲間との協同は自己理解や他者理解の深まりにつながる¹¹⁾ことが指摘されており、以上のような活動は、親密度の高い幼児のみならず多様な関係性の幼児とのかかわりを提供し得ると考えられる。

以上を踏まえ、本研究は、音楽的な変化を合図として2人組形成を繰り返す活動において、5歳児がどのような相手を選択し、どのように2人組を形成するのかを明らかにすることを目的とする。

2 方法

2-1 調査対象

本研究の対象は、A保育所の5歳児クラスの幼児（男児13名、女児9名の計22名）とした。A保育所では、月に1、2回の音楽活動を取り入れており、本研究の対象である5歳児は、筆者が担当する音楽活動に4歳児クラスの時から取り組んだ。本研究の音楽活動も筆者が担当した。また、2人組を形成する活動は4歳児クラスの後半から経験しているが、当初は、特定の幼児に固執したり、なかなか相手に接触できなかったり、2人組形成が追いかけてこなかったりする幼児や、同年齢の仲間とではなく保育者やアシスタントとの2人組形成を好む幼児の姿が見受けられた。そのため、様々な幼児とかわかすることに意識が向くように、「近くの人と2人組」や「さっきとは違う人と2人組」といった声かけを行ったが、本研究においても同様の声かけを限定的に使用している。

2-2 調査期間

2013（平成25）年5月14日、28日、6月25日、7月23日、8月27日、9月24日の計6日実施した。音楽活動は全てビデオカメラで録画した。

2-3 活動内容

A保育所での音楽活動は約30分である。活動の最初に、ピアノの即興演奏に合わせてステップする活動を行い、幼児がホール全体に広がっている状態から2人組の活動に移行した。2人組活動の流れは、まず「近くの人と2人組になろうね」という声かけのもと、幼児は自身が選んだ相手と2人組になり（2人組1回目）、音楽に合わせて手合わせ

などを行った。次に、手合わせなどの音楽から幼児1人で動く音楽（例えばスキップ）に変化すると、2人組を解消し幼児1人で動いた。再度、音楽が変化すると幼児は即座に2人組になり（2人組2回目）手合わせなどを行った。2人組2回目においては、幼児が2人組の相手を選択している際に、「さっきとは違う人と」という声かけを加えた。その後の2人組3回目や2人組4回目の相手選択に際しては、声かけは行わなかった。すなわち、①声かけによる2人組（2人組1回目）→1人での動き→②音楽の変化による2人組：声かけあり（2人組2回目）→1人での動き→③音楽の変化による2人組：声かけなし（2人組3回目）→1人での動き→④音楽の変化による2人組：声かけなし（2人組4回目）のように、2人組になる機会を4回設けた。

2-4 分析方法

まず、4回の2人組形成において、違う相手を選択する回数を算出する。次に、全6日間を通して2人組を形成した相手数が多かった幼児と少なかった幼児を抽出し、どのように2人組形成を行っていたのかを分析することとする。

A保育所の5歳児は22名であるが、欠席などにより参加人数が奇数となった場合に、保育者が加わるのか、3人組を形成するのかは、幼児の自発性に委ねた。そのため、保育者が2人組の相手として選択される場合も、分析対象とした。

2-5 倫理的配慮

本研究の遂行にあたり、事前にA保育所に調査目的と調査方法を説明し、調査実施とビデオ撮影に対する許可を得た。また本論文に登場する幼児はすべて仮名とした。

3 結果と考察

3-1 2人組形成における相手選択の推移

4回の2人組形成において、異なる相手を選択した回数とその割合を図1に示す。3人組を形成した場合、違う回においてどちらか1人と2人組を形成していれば、同じ相手を選択したとみなした。

調査を開始した第1日目には、全幼児が4回とも異なる相手と2人組になっていた。その後、第2日目から第5日目には、同じ相手と2人組になる幼児が出現し、調査最終日の第6日目においては、再度、全幼児が4回とも異なる相手と2人組になっていた。

同じ幼児と2人組形成を行ったペア数や事例に関する考察は後に詳述するが、いずれの活動日においても、多くの幼児が4回の相手選択において違う相手を選択していた。このような相手選択の背景について以下のことが考えられ

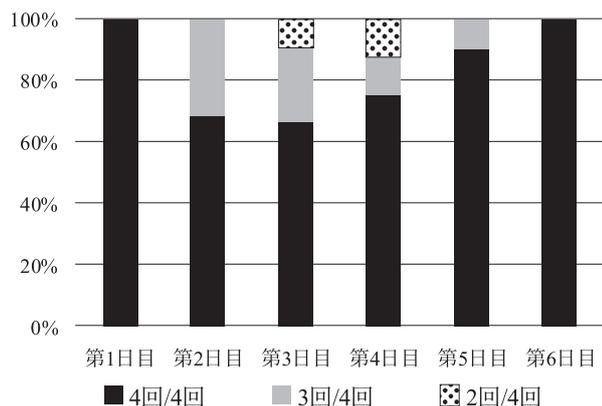


図1 4回の2人組形成において異なる相手を選択した回数とその割合

る。本研究を行う前に、A保育所の保育者から「同じ相手を選択している幼児が多いように感じる」といった発言があり、また特定の幼児に固執し、他児を受け入れられない幼児も見受けられた。そのため、「さっきとは違う人」という声かけを加えて、幼児の相手選択の幅を広げようとした。この声かけにより、違う幼児と2人組になることを意識することがある程度定着し、また特定の幼児だけでなく他児にも目を向けることができるようになったのかもしれない。また、音楽的な変化を合図としているため、高い即時性が求められることにより相手選択へのこだわりや迷いが排除され、即座に違う相手と2人組になることに意識を

集中することができたのではないとも考えられる。さらに、2人組を形成する活動を積み重ねることで、活動に慣れ、その余裕が相手選択に影響したといえるかもしれない。

しかしながら、上記のように4回の相手選択で4回とも違う相手と2人組になる幼児が多い中で、同じ相手を選択する幼児が確認された。そこで、どのような経緯で同じ相手と2人組を形成したのかについて事例を分析した。その結果、同じ相手を選択した事例として、10事例が確認された(表1)。同じ幼児との2人組形成は、親密度の高い特定の幼児を複数回選択することによって生じると推測されたが、事例を分析した結果、以下の6種類の接触の経緯が確認された。具体的には、①特定の幼児との2人組形成の試み、②音楽の変化時における偶発的な遭遇、③3人組形成による相手への興味の萌芽、④3人組形成の発生、⑤別の相手との2人組不成立、⑥最後の2人組形成であった。

さらに、6種類の接触の経緯は以下の2つのカテゴリに大別された。一つ目は、接触の経緯①③のように、どちらか一方の幼児が特定の幼児に対して2人組形成を複数回試みることにより、同じ幼児と2人組が形成されており、二つ目は、接触の経緯②④⑤⑥のように、音楽的な変化を合図として2人組形成が促される中で意図せず同じ幼児と2人組が形成されていた。接触の経緯①と③において、特定の幼児との2人組を試みた幼児は、自分の思いを達成すべ

表1 同じ相手を選択した事例と接触の経緯

活動日	事例	2人組を形成した回	様子	接触の経緯の種類
第1日	・全員が異なる相手と2人組を形成した			
第2日	1. SちゃんとKくん	1回目・4回目	KくんがSちゃんに対して、全ての回において2人組形成を試みた	①
	2. UくんとCくん	1回目・3回目	どちらの回も、Uくんが別の相手と2人組を形成したところにCくんが強引に参加し3人組を形成した	①
	3. YちゃんとHくん	2回目・4回目	4回目の際、最後の3人となり3人組を形成した	⑥
第3日	4. YちゃんとRくん	1回目・3回目	YちゃんがRくんに対して、全ての回において2人組形成を試みた	①
	5. EくんとFくん	2回目・3回目・4回目	互いが別々の方向に走っていったにもかかわらず、音楽が変化した時に偶発的に向き合うような状況になり2人組を形成し、次の回においてもEくんがFくんを追いかけ2人組を形成した	②
	6. TくんとHくん	1回目・4回目	4回目の際、HくんとDくんが2人組を形成したところにTくんが合流し3人組が形成された	④
	7. TくんとDくん	2回目・4回目		④
第4日	8. YちゃんとIちゃん	1回目・2回目・3回目	1回目の際、Yちゃんは男児と2人組を形成したが、Iちゃんが加わり3人組になったことを契機として、2回目、3回目、4回目と、YちゃんがIちゃんに対して接触を試みた	③
	9. OちゃんとTくん	2回目・3回目	OちゃんとTくんは別々の方向に走っていったにもかかわらず、Oちゃんが別の幼児と2人組形成が不成立となり、再度相手を探す過程でTくんと出会い2人組を形成した	⑤
第5日	10. NちゃんとLちゃん	3回目・4回目	4回目の際、最後の2人となり2人組を形成した	⑥
第6日	・全員が異なる相手と2人組を形成した			

く、主体的に行動していた。例えば、接触の経緯③の事例8の幼児は、普段かかわることが少ない幼児とのグループ形成を契機とし、同じ相手に接近し続けた。初めは相手に声をかけられず追いかけるだけであったが、次の回において自分から相手に手を差し出し「一緒にやろう」という意思を行動で示し、方略を変化させていた。また、接触の経緯②④⑤⑥は、音楽の変化時に偶然同じ相手と向かい合う状況になったり、別の相手との2人組形成が不成立後に相手を探す過程で同じ相手と出会ったり、他の幼児が2人組形成を行ったため同じ幼児とせざるを得ない状況が生じるなど、同じ幼児と意図せず2人組を形成する状況がつけられていた。

3-2 相手選択と接触パターン

全6日間の活動を通して、相手として選択した幼児の人数を算出し、かかわった相手数が多い幼児2名（AちゃんとHくん）と、かかわった相手数が少ない幼児2名（DちゃんとUくん）を抽出した。以上4名が2人組を形成する過程を分析した結果、①自分から相手に接触する、②違う幼児と2人組不成立後に自分から相手に接触する、③相手から接触される、④違う幼児と2人組不成立後に相手から接触される、⑤どちらともなく相手に接触する、⑥違う幼児と不成立後にどちらともなく相手に接触する、⑦最後の2人組形成、⑧違う幼児と2人組不成立後に最後の2人組形成という8種の接触パターンが確認された（表2）。また、4名が相手に接触した全ての行動を表3に示す。

①かかわった相手数が多かった幼児について

まず、Aちゃんは接触パターン①や②において、「○○ちゃん!」と相手の名前を呼んだり、「一緒にやろう!」と声をかけたり、相手に全速力で駆け寄って両手をつないだりと、積極的且つ即座に相手に接触することが多かった。また、接触パターン②や⑥のように、2人組形成の不成立後にすぐに次の相手を自ら見つけたり、接触パターン⑤のように、1人での動き（例えば、スキップ）の際に近くにいた幼児と2人組を形成したりと、素早く行動していた。

次に、Hくんは接触パターン⑦のように、多くの幼児がすでに2人組を形成しており、自身がある幼児と2人組を形成しなければならない状況においても、相手には近寄るが、2人組形成を決定づけるような接触を行うことに積極的ではなく、手を差し出したり、引っ込めたりしながら、模索している様子であった。また、接触パターン⑦以外の状況においても、2人組になる相手を決めるのに時間がかかったり、相手の顔を覗き込むだけであったりなど、積極的な接触は多く見られなかった。しかしながら、接触パターン③と④のように、相手から背中を軽く叩かれたり、駆け寄せられたりすることが多く、またそのように接触してきた相手を拒まず、受け入れる姿が多く確認された。

以上のように、様々な幼児と2人組を形成していたAちゃんとHくんであったが、自分から相手の名前を呼んだり駆け寄ったりと積極的且つ即座に行動するAちゃんと、相手から駆け寄せられることが多く、自分から相手に接触することに積極的ではないHくんとは、2人組になる方法が

表2 調査6日間を通して選択した相手数の違いにおける接触パターンとその回数

2人組形成時の接触パターン		相手数が多かった幼児				相手数が少なかった幼児			
		Aちゃん		Hくん		Dくん		Uくん	
自分から	①自分から相手に接触する	5		1		9		3	
	②違う幼児と2人組不成立後に自分から相手に接触する	4	9	0	1	2※	11	0	3
相手から	③相手から接触される	3		4		6		6	
	④違う幼児と2人組不成立後に相手から接触される	0	3	2	6	0	6	2	8
互いに	⑤どちらともなく相手に接触する	7		4		7		10	
	⑥違う幼児と不成立後にどちらともなく相手に接触する	1	8	0	4	0	7	2	12
最後に	⑦最後の2人組形成	0		5		0		0	
	⑧違う幼児と2人組不成立後に最後の2人組形成	0	0	0	5	0	0	1	1
2人組を形成した回数（回） / 6日間を通して選択した相手数（名）		20/16		16/13		24/10		24/10	
1回の2人組形成において選択した相手数（名）		0.8		0.8		0.4		0.4	

※自分から2人組を拒否して2人組が不成立となった1事例を含む。

表3 抽出した4名の接触時における行動

	Aちゃん	Hくん	Dくん	Uくん
1 日目	<p>①素早く駆け寄った相手が違う幼児と2人組を形成したため2人組不成立。その後すぐに振り返り「○○ちゃん」と声をかけ手をつなぎ2人組</p> <p>②周りを見渡してから遠くの相手に「○○ちゃん」と呼びながら走り、両手をつかみ2人組</p> <p>③周りの様子を見ていると相手に駆け寄られ2人組</p> <p>④先生に駆け寄って2人組</p>	<p>①最後の4人になり、近くにいた幼児に両手を広げて2人組</p> <p>②相手に駆け寄り真正面から顔をのぞき込むが相手の反応はなく2人組不成立。その後相手に駆け寄られ2人組</p> <p>③最後の1人となり、先生と2人組</p> <p>④最後の2人となり、「もうおらんからやろうや」というHくんの言葉で2人組</p>	<p>①周りを見回し、見つけた相手に手を差し出し、相手が見つめないのを待ち2人組</p> <p>②相手に近づき、相手が気づくのを待ち2人組</p> <p>③周りを見回し、相手の横から片手をつかんで真正面に体をよせて2人組</p> <p>④自分の方を向いて立っていた幼児と2人組</p>	<p>①ステップの際に隣にいた幼児と両手をつないで2人組</p> <p>②相手の手をつかんだが、相手が違う場所に行ってしまう2人組不成立。その後、横にいた幼児に接触され、手をつなぎ2人組</p> <p>③相手に駆け寄られ2人組</p> <p>④周りを見回すが、なかなか相手を決められずにいると幼児に駆け寄られ2人組</p>
2 日目	<p>①ステップの際から体を接触させて歩いていた幼児と手をつなぎ2人組</p> <p>②相手に「Aちゃん」と駆け寄られて2人組</p> <p>③後ろにいた幼児に駆け寄られ2人組</p> <p>④相手に近寄るが、相手が別の幼児と2人組になり、2人組不成立。手合わせの仕草をしながら相手を探し、同じ動きをした幼児と手合わせし2人組</p>	<p>①横にいた男児とすぐに2人組</p> <p>②手合わせの動きをしながら相手に近寄るが別の幼児に先を越されて2人組不成立。その後、相手を探しているうちに背中をトントンとたたかれて2人組</p> <p>③2拍子の手合わせの動きをしながら動いていると、幼児に駆け寄られ2人組</p> <p>④周りが素早く2人組になったため、最後の3人となり3人組</p>	<p>①ステップの際に笑みを交わしていた幼児と2人組</p> <p>②集団から離れていたところを歩いていたため、相手の真正面に駆け寄り2人組</p> <p>③集団から離れていたところを歩いていたため、相手の真正面に駆け寄り2人組</p> <p>④周りを見回しているときに向き合った状態の幼児が、別のところに行こうとするのを通せんぼをして2人組</p>	<p>①相手に駆け寄り2人組。その後1人加わり3人組</p> <p>②相手の背中をさわっている間に、別の幼児が相手の両手を握って2人組になったため、2人組不成立。その後幼児に駆け寄られ、両手をつかまれ2人組</p> <p>③近くをステップしていた幼児と2人組。その後1人加わり3人組</p> <p>④横をステップしていた幼児と向き合って2人組</p>
3 日目	<p>①近くの幼児に駆け寄るが3人になり、2人組不成立。その後、周りを見回してから近くにいた幼児と「一緒にやろう」と両手をつなぎ2人組</p> <p>②横にいた幼児と手をつないで2人組</p> <p>③周りを見回した後、勢いよく相手に駆け寄り、「○○くんしよう」と両手をつかみ2人組</p> <p>④近くにいた友達と互いが両手をつないで2人組</p>	<p>①見回しながら歩いていると、互いに気づき駆け寄って、両手をつないで2人組</p> <p>②歩きながら友達に声をかけそうだが、最後の3人となり、そのうちの2人と2人組</p> <p>③あちらこちら走り回っていると相手と向き合う状態になり手をつかんで2人組、その後別の幼児が合流し3人組</p> <p>④走りをとめて振り返ると、そこにいた友達に手を差し出されて2人組</p>	<p>①ステップの際に前を歩いていた幼児と向き合って手をつないで2人組</p> <p>②近くにいた幼児3人が向かい合ったが、他の2人が2人組になり、2人組不成立。その後、近くにいた幼児のもとに駆け込んで両手をつないで2人組</p> <p>③1人で走る際に近くにいた幼児と向き合い両手をつないで2人組</p> <p>④周りを見渡し、後ろにいた幼児に手を差し出し2人組</p>	<p>①男児3人が集まったが、Uくんが抜けて2人組不成立。その後、別のところに歩いている時に出会った幼児と両手をつないで2人組</p> <p>②近くにいた3人が向き合い、その中の1人と2人組</p> <p>③1人で走る際に近くにいた幼児と向き合い両手をつないで2人組</p> <p>④立ち止まり周りを見回していると、駆け寄られ2人組</p>
4 日目	<p>欠席</p>	<p>欠席</p>	<p>①近くにいた幼児に両手を差し出されたが受け入れず、2人組不成立。その後、別の幼児に手を差し出すが、違うところに行こうしたため、両手をしっかり握りしめて2人組</p> <p>②周りを見回し、幼児を見つけ走りだし、手を差し出し2人組</p> <p>③大勢の幼児がいる方向に走ると相手と向き合い2人組</p> <p>④後ろをスキップしていた幼児に駆け寄られ2人組</p>	<p>①近くにいた幼児と向き合い、両手をつないで2人組</p> <p>②前を走っていた幼児が、後ろにもどるように駆け寄り2人組</p> <p>③近くにいた幼児の背中や腕をつかむが、相手が別の幼児と2人組になり、2人組不成立。その後、違う方向に体を向けると、別の幼児と向き合う状態になり2人組</p> <p>④近くをスキップしていた幼児と向き合い2人組</p>
5 日目	<p>①近くにいた相手の両手をつかむが、相手が別の幼児のところに行き2人組不成立。その後、すぐに後ろを振り返り、向き合った幼児の腕を握って2人組</p> <p>②隣を走っていた相手と両手をつないで2人組</p> <p>③隣を走っていた相手と両手をつないで2人組</p> <p>④近くにいた相手の両手をつかんで2人組</p>	<p>①遠くから相手に駆け寄られ、肩か腕をたたかれ2人組</p> <p>②あちらこちらに走り、相手を探していると、相手に真正面から駆け込まれ2人組</p> <p>③自分の周りを見回し、ある幼児に対して手を前に差し出して2人組</p> <p>④あちらこちらに走ったりしているうちに、相手と向き合い、両手をつないで2人組</p>	<p>①立ち止まったまま周りを見回した後、歩いていると相手を見つけ駆け寄り、両手をつかんで2人組</p> <p>②隣を走っていた幼児に片手を握られて2人組</p> <p>③相手に後ろから片手をつかまれて2人組</p> <p>④相手に駆け寄られ2人組</p>	<p>①隣にいた幼児に片手を握られ2人組</p> <p>②幼児の背中をつかんで2人組</p> <p>③後ろから幼児に両手をつかまれて2人組</p> <p>④反対方向から走ってきた相手と2人組</p>
6 日目	<p>①相手に近寄るが、相手が別の幼児と2人組になり2人組不成立。近くにいた相手の両手をつかんで2人組</p> <p>②ステップの際、遠くの相手に手を振りその後駆け寄り2人組</p> <p>③相手を探そうとあちらこちらを走っているうちに2人組</p> <p>④近くにいた幼児と互いに向きなおし2人組</p>	<p>欠席</p>	<p>①近くにいた幼児と2人組</p> <p>②1人で走っている際、びったり横にいた幼児に、駆け寄られて2人組</p> <p>③あちらこちらを走っているうちに2人組</p> <p>④ホールの中央に向かって走っていると、前から幼児に駆け寄られて2人組</p>	<p>①隣にいた幼児と向き合って2人組</p> <p>②周りを見渡してから全速力で駆け寄り2人組</p> <p>③前にいた幼児と向き合い2人組</p> <p>④相手に駆け寄るが、別の幼児と2人組を形成したため2人組不成立。その後、最後の2人となり保育者に促されて2人組</p>

2人組は接触パターン①②（自分から）、2人組は接触パターン③④（相手から）、2人組は接触パターン⑤⑥（どちらともなく）、2人組は接触パターン⑦⑧（最後の）を示す。

異なっていた。そのため、相手に積極的に接触するという行動のみが、様々な幼児との2人組形成を促す要因であるとはいえないだろう。またAちゃんとHくんの両者とも、2人組形成を試みようとした相手が自身とは違う幼児のところに向かい、2人組が不成立になる経験をしていたが、一方で、自身が2人組形成を求められた場合に、相手の誘いに応じない事例はなかった。このように、相手を柔軟に受け入れるという傾向が、様々な幼児との2人組形成を可能にしていたのではないかと考えられた。

②かかわった相手数が少なかった幼児について

まず、Dくんは、自分から接触することが多く、最後に2人組を形成することはなかった。接触パターン①と②の際、相手の横側から片手を握ったり、遠くからでも相手の真正面に駆け寄りすることが多く、また相手が違うところに行こうとしても、通せんぼうをしたり、両手を握りしめたりしていた。また接触パターン⑤の際には、近くをステップしていた相手と向き合ったりすることで2人組を形成しており、加えて6回中3回は後述するUくんと2人組を形成していた。

次に、Uくんは、全ての活動日において、4回の相手選択のうち1回は特定の男児と2人組を形成していた。また接触パターン③④⑤⑥のように、相手から接触されたり、互いに接触したりすることが多い幼児であった。さらに、2人組が不成立になることが多く、相手の背中を触ったり、腕をつかむが、タイミングが合わず、相手が別の幼児と2人組を形成したり、3人の男児が集まったが、Uくんがその輪から抜けたりする姿が確認された。そのため、相手には接触はするものの、積極的に自分の思いを主張するタイプの幼児ではないように見受けられた。また、相手がUくんに駆け寄ったことで2人組になっても、相手の顔を見たり話したりするのではなく、他の友達を探しているかのように周囲を見まわす姿が見られた。一方で、2人組を形成することが多かった相手には、全速力で駆け寄り、背中をつかむなどといった行動をとっていた。

以上のように、かかわった相手数が少なかったDくんとUくんだが、両者とも2人組になりたい相手、もしくはなりやすい相手がいるようであった。またDくんは、遠くから駆け寄り、通せんぼうをしたりして自分の主張を行動で表し、一方Uくんは、毎回の活動で1回は特定の幼児と2人組を形成したものの、その他の場面では自分の主張を押し通すような行動ではなく、2人の接触パターンの特徴は異なる点もあった。

かかわった相手数が多かった2人組を形成した2名と、かかわった相手数が少なかった2名の接触パターンについて、誰に対してもすぐに近寄ることができる、もしくは近

寄ってきた相手は誰でも受け入れられる前者と、近寄りやすい相手や2人組になりたい相手が限定的である後者とは、相手選択における柔軟性や受容性の程度に差があるといえそうだ。

4 総合考察

本研究は、音楽的な変化を合図として2人組形成を繰り返す活動において、幼児はどのような相手を選択し、どのように2人組を形成するのかを検討した。

4回の相手選択において、4回とも違う相手と2人組を形成する幼児が多く、違う相手を選択するということがある程度定着しているといえた。しかし、全活動を通してかかわった相手数を算出した結果、かかわった相手数が多かった幼児と少なかった幼児とでは、数値としては2倍の差があった。その背景として、かかわった相手数が少なかった幼児に関しては、各活動日に4回中4回とも違う相手を選択していても、毎回一度は特定の幼児と2人組を形成するなど、接触したい相手や接触しやすい相手が存在することが指摘される。しかし、接触したい相手やしやすい相手と常に2人組形成ができるわけではないため、自分の思いとは違う相手とであっても気持ちを切り替えて活動していたといえる。つまり、4回の相手選択において、違う相手を選択した行動には、接触しやすい幼児とのかかわりや、自分の思いとは異なる幼児とのかかわりが混在し、多様なかかわりがもたらされていた。

また、4回の相手選択において、同じ相手と2人組を形成していた幼児が確認された。同じ相手との2人組形成は「違う人と」という指導者の意図とは異なる行動である。しかし、幼児の行動を分析した結果、相手に何度も接触した場合や、音楽的な変化を合図とすることにより意図せずもたらされた場合があった。前者においては、自分の思いを達成させようと様々な接触方法を模索していた。そのため、5歳児において違う相手を選択する経験のみならず、同じ相手を選択する経験にも、人とのかかわり方を学んだり試したりする機会となり得るといえよう。

実践を担当した者としては、音楽的な変化を合図として、素早く相手に接触することが、仲のよい幼児にこだわらず、様々な幼児との2人組形成につながるのではないかと推測していた。確かに、かかわった相手数が多かったAちゃんの行動は、推測をおよそ支持するものであったが、同じくかかわった相手数が多かったHくんは、時間を要しながらも、相手に接触する方法を模索しており、素早く相手に接触することのみが、多様な相手との2人組を促すわけではなかった。さらに、素早く相手に接触する力は、駆け寄りと思う相手の出現や、その相手に接触する勇気や接触する方法を試行錯誤する中で培われていく力である

ため、指導者は素早く2人組になることを促すだけではなく、Hくんのような行動を見守り援助する姿勢が必要なのではないかと考えられる。

また、抽出した4名とも、2人組の不成立を数回経験していたことが確認された。具体的には、駆け寄った相手が別の幼児と2人組を形成した、顔をのぞき込むが相手の反応がなかった、3人が集まり自分以外の幼児が2人組を形成した(表3)などであった。一方で、いずれの不成立後においても、別の相手に駆け寄られたり、後ろを振り返り近くの幼児に声をかけたりしながら、別の相手と2人組を形成していた。これらを踏まえると、2人組の不成立は珍しい出来事ではなく、不成立後の直後には活動への意欲が喪失する場合もあるであろうが、音楽的な変化を合図としたゲーム的要素が、気持ちの切り替えを容易にしているのではないだろうか。加えて、このような経験が、次の2人組形成の際に素早く接触しようとする意欲につながるのかもしれない。

以上のように、音楽的な変化を合図として様々な相手と

の2人組形成を促す活動は、人とかかわろうとする思いを後押ししたり、気持ちを切り替えて相手とかかわったりする機会を提供しているといえるだろう。仲のよい幼児のみならず、多様な幼児とのかかわりを促す可能性が期待できる。

本研究の課題として、以下の3点が挙げられる。まず、本研究では様々な幼児と2人組を形成するよう声かけを行った。声かけには指導者のねらいが含まれているため、声かけをしなかった場合についても検討する必要があるであろう。次に、本研究の結果には、2人組形成の活動を導入した4歳児クラスの時の経験が影響している可能性が考えられる。そのため、活動の導入時から縦断的に調査することも提案される。最後に、音楽活動における2人組の相互作用と自由遊びにおける2人組の相互作用とを比較検討することを通して、両者の関連性や相違を明らかにし、集団生活において相互作用を促す活動の意味の追究と具体的な提案につなげていくことが挙げられる。

注

- (1) 子安増生・服部敬子(1999) 幼児の交互交代と「心の理論」の発達. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45. 1-16
- (2) 藤田文(2007) 魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動—交互交代の規準と主導者に着目して—. 発達心理学研究, 18(3), 227-235
- (3) 藤田文(2014) お絵かき遊び場面における幼児の交互交代行動. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 51. 1-14
- (4) 礪波朋子・三好史・麻生武(2002) 幼児同士の共同意思決定場面における対話の構造. 発達心理学研究, 13(2). 158-167
- (5) 小川容子(2005) お手遊び唄の習得過程—就学前児童を対象としたフィールド実験—. 地域学論集, 2(2). 243-255
- (6) 板倉達哉・柄田毅・長崎勤(2010) 他者との共同行為による幼児のタスク習熟度の発達. 障害科学研究, 34. 129-138
- (7) 越中康治・江村理奈・目久田純一・前田健一(2005) 幼児の自由な集団編成に及ぼす人気度と社会的行動特徴の影響. 広島大学心理学研究, 5. 161-167
- (8) 遠藤晶・江原千絵・松山由美子・内藤真希(2011) ふれあい遊びにおける双方向性—手をつなぐ行為に着目して—.

武庫川女子大学大学院教育学研究論集, 6. 21-29

- (9) 神原雅之・高橋敏唯(1990) リトミック指導と人間関係の育成. ダルクローズ音楽教育研究, 15. 3-17
- (10) 同上
- (11) 岩田純一(2014) 子どもの友達づくりの世界. 金子書房

謝辞

本研究の意図をお汲み取りくださり、観察調査に心よくご協力くださいました保育所の所長先生をはじめ保育者の方々子どもたちに心より感謝申し上げます。また、本研究をまとめるにあたりご指導くださいました金沢大学の滝口圭子教授に深く感謝申し上げます。

付記

本論文は2013年度(平成25年度)に金沢大学教育学研究科へ提出した修士論文「幼児が友達と関わる契機を提供するリトミック教育の可能性」での調査内容をさらに分析し、まとめ直したものである。また本論文の一部を日本保育学会第71回大会(2018)及び日本ダルクローズ音楽教育学会第17回研究大会(2017)において口頭発表している。

